

2021年度千葉大学日本語プログラムオンライン学習調査の結果報告 —コロナ後の日本語教育に向けて—

野村 和之・吉野 文・西住 奏子・佐藤 尚子

千葉大学大学院国際学術研究院

Students' Perception of Online Japanese Language Learning in 2021: Toward Better Post-COVID19 Teaching

NOMURA Kazuyuki, YOSHINO Aya, NISHIZUMI Kanako, and SATO Naoko

要旨

千葉大学国際教育センターでは、2021年度前期に日本語教育プログラムの授業を受講した者を対象に質的インタビューを実施し、29名から回答を得た。学習者は総じてオンライン授業より対面授業を好んだ。主な要因として、オンライン授業では対面授業に比べ、学習者間のインタラクションが取りにくい点が挙げられた。一方、学習管理システム（LMS）を活用したフィードバックには高い評価が寄せられるなど、コロナ後のカリキュラム設計に有益な知見が得られた。

Abstract

Chiba University's Center for International Education conducted qualitative interviews with those who enrolled in Japanese language classes in the spring semester starting April 2021 and gained responses from 29 learners. The participants generally preferred face-to-face classes to online classes. The primary reason was their difficulty interacting with other learners in online classes compared with face-to-face classes. And yet, learners appreciated feedback from their teachers using the university's learning management system. Our findings will help us design a better curriculum for teaching Japanese in the post-pandemic world.

キーワード

日本語教育、コロナ禍、オンライン学習、インタラクション

Keywords: Teaching Japanese as a foreign language, COVID-19, Online learning, interaction

1 はじめに

2020年初頭に発生したコロナ禍はオンライン授業への急転換をもたらした。しかし、距離を隔てた世界各地の留学生を対象とするオンライン日本語授業では、教師が学習者の学びの実態を把握しにくい。また、コロナ禍のオンライン授業が応急措置として始まったとはいえ、その経験をコロナ後の日本語教育にどのように活用すべきかについて、十分な議論が尽くされているとはいえない。コロナ禍以前にオンライン教育の専門的訓練・実践経験を積んだ教師は多くはなかったが (Moser et al., 2021)、コロナ禍発生から約2年が経過し状況は一変した。今日、日本語教育は教師の専門性を高め、質の高いオンライン授業を提供するための知見を蓄積する段階に来ている。

千葉大学国際教育センターでは、留学生への教育支援の質的向上を目指し、2021年前期に千葉大学の日本語授業を受講した29名の留学生に、オンライン授業での学びに関する質的インタビューを実施した。その結果、オンライン授業より対面授業を好む声が概して多く聞かれた。さらに、オンライン授業では教師・学習者間および学習者同士のインタラクションを増やし、各自のネット接続を含めた学習環境に配慮するなどの教育支援のポイントが明らかになった。

本稿ではオンライン学習調査の結果を報告するとともに、コロナ禍収束後のオンライン授業のあり方を見据えたカリキュラム改善に関する提言を行う。次節以降では、千葉大学の日本語プログラムと学習者の概要を概観した後、研究件数が急増する国内外のコロナ禍でのオンライン授業に関する先行研究を紹介する。続いて、本調査の方法論を述べてから、調査結果を先行研究と比較・検討した上で、コロナ後の日本語カリキュラムに関する提言を行い、本調査では十分に明らかにすることができなかった点を今後の研究課題としてまとめに代える。

2 千葉大学日本語プログラムと学習者の概要

千葉大学国際教育センターは、千葉大学に在籍し、日本語教育を必要とする学部生・大学院生・研究生・特別聴講学生・科目等履修生¹⁾・予備教育生²⁾・研究者を支援するための日本語教育プログラムを提供している。

日本語教育プログラムのカリキュラムは大きく、基礎的な日本語能力の養成を目標とする「初級・初中級」(100・200・300の3レベル)、日本語で教育を受け、研究を行う前提となる日本語能力の養成を目標とする「中級」(400・500・600の3レベル)、スキル別に高度な日本語能力の養成を目標とする「上級」(700・800の2レベル)の3段階に分かれる。

学習者の幅広いニーズに対応すべく、ベースとなる「総合」³⁾に加え、「口頭表現」・「文章表現」・「読解」・「漢字」・「文法」など、分野別・スキル別のカリキュラムを編成しており、特に中級・上級では多彩なラインアップの日本語科目が提供されている。開講科目数

表1 2019年度前期～2021年度後期の日本語科目受講者数（単位：人）

| キャンパス | 西千葉 | | 松戸 | | 亥鼻 | | 合計 | |
|----------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|------------------|--------------|--------------|
| | 受講者数 (実数) | 受講者数 (のべ) | 受講者数 (実数) | 受講者数 (のべ) | 受講者数 (実数) | 受講者数 (のべ) | 受講者数 (実数) | 受講者数 (のべ) |
| 2019年度前期 | 252 | 652 | 33 | 40 | 12 | 12 | 297 | 704 |
| 2019年度後期 | 268 | 664 | 41 | 41 | 12 | 12 | 321 | 717 |
| 2020年度前期 | 125 | 377 | 非開講 | | 非開講 | | 125 | 377 |
| 2020年度後期 | 43 | 152 | 23 | 25 | 3 | 3 | 69 | 180 |
| 2021年度前期 | 87 | 249 | 24 | 28 | 15 | 15 | 126 | 292 |
| 2021年度後期 | 106 | 345 | 21 | 21 | 3 | 14 ¹⁾ | 130 | 380 |

が多く幅広い授業が提供できるのは学生数の多い西千葉キャンパスに限られるが、松戸・亥鼻の両キャンパスでも初級・中級（100・200・400レベル）の授業を開講している。

コロナ禍に見舞われる前の2019年度後期までは、すべての日本語科目が対面授業で実施されていた。しかし、緊急事態宣言が発出された2020年度前期からは、原則として対面授業を中止し、執筆時点（2021年11月）までオンライン授業を行っている。2019年度から2021年度までの日本語科目の受講者数（実数とのべの人数）を表1に示す。

2020年度前期は、緊急事態宣言発出にともない、4月初めから5月の連休明けまで授業が行われないこととなった。オンライン授業の実施体制が整わない中で、どのようにすれば授業が実施できるかを検討した結果、松戸・亥鼻キャンパスの授業は非開講として全授業を西千葉キャンパスに集約し、卒業・修了要件に日本語科目の受講が必要な学生のみを対象に、学習管理システムとしてMoodleを使用したオンデマンド型授業を提供することとした。そのため、西千葉キャンパスの受講者数が、対面授業実施時に比べ半減した。2020年度後期はMicrosoft Teamsを使用した同時双方向型授業が、2021年度前期からはZoomを使用した同時双方向型授業が、Moodleを併用しながら行われるようになった。2020年度後期からは、対面時と同様の科目数（54科目）の授業を提供した。しかし、対面授業を復活するかを決定する時点（2021年9月）で、国費留学生の入国は目処が立ったものの、私費留学生については当面入国がかなわない状態が続いているため、2021年度後期もオンライン授業で実施することとなった。

3 コロナ禍とオンライン日本語授業

オンライン授業に関する研究は以前から行われていたものの、コロナ禍の影響で対面授業からオンライン授業へ切り替えざるを得なくなった2020年前半以降、オンライン授業の研究に関する蓄積が急速に進んだ。本稿では主に、言語教育を取り上げた先行研究を検討する。国内外の学術誌において、オンライン授業と対面授業の取り組みの比較、文法・漢

字・口頭表現等科目ごとの調査、オンライン授業で使用されるLMS、Zoom等の同時双方向型ツールに関する分析、オンライン授業に対する教師の評価と学生の評価のまとめ、オンライン授業の学習効果の検証などを含む、広範なトピックの先行研究が発表されている。本節では、議論の前提としてオンライン授業のメリット・デメリットを把握すべく、先行研究で学習者からの言及が多く見られたインタラクション・アウトプット・フィードバック・オンデマンド授業・学習環境の5点に焦点を絞って既存の研究結果を俯瞰する。

3-1 インタラクション

インタラクションについては、学習者がオンラインによる授業を肯定的に捉える意見として、話す練習がしっかりできる点（石崎, 2021）、他の学習者の顔が見える点（河内ほか, 2021）が挙げられる。一方で、他の学生と話しにくい、友達に会えない、対面のほうが勉強しやすい、クラスメイトのことがよくわからないなどと感じる学習者もいた（河内ほか, 2021）。また、パリハワダナほか（2021）の学習者アンケート（回答者数=166）では、表記・作文・聴解・読解と比べ、会話はオンライン授業で達成感が得にくく、とりわけ会話に関しては対面授業のほうがよいと答えた学生の割合（74.7%）が、オンラインによる授業のほうがよいと答えた学生の割合（10.2%）を大きく上回った。

国外の研究でも、Lomicka et al. (2020) はオンラインの言語授業では「ヴァーチャルな一体感」(virtual community) を形成できるかが鍵になると述べ、同時双方向型授業とオンデマンド型授業を組み合わせながら、教師と学生そして学生同士が深く関わる工夫をしていくことの大切さを論じている。またWong (2020) も、オンライン授業で学生のニーズに応えるポイントとして「やる気」(arousal)・「自律性」(autonomy)・「つながり」(relatedness)・「能力」(competence) の4点を挙げる。

3-2 アウトプット

アウトプットについては、話す練習がしっかりできたこと（石崎, 2021）や、授業中でも辞書などのオンラインツールを自由に使いながら話せること（河内ほか, 2021）がメリットとして挙げられていた。またZoomのチャット機能が使いやすいと答える学生も多く（河内ほか, 2021）、気後れすることなく発言したり質問したりできるチャット機能は、学生のアウトプット量を増やす材料と言えよう。国外の研究でも、Ruiz-Alonso-Bartol et al. (2021) が、Zoomによる同時双方向型授業では、お互いの発話を聞く機会が増えるため、発話量が増加したと感じる学習者の存在を報告している。

3-3 フィードバック

フィードバックについては、オンライン授業での質問のしやすさと相まって、Zoomのチャット機能ですぐに教師からのレスポンスが得られることをメリットとして挙げる学習者がある（河内ほか, 2021）。また、LMSとしてGoogle ClassroomをZoomと併用した授業に

関する調査によれば、Zoomによる同時双方向型授業で活動を行った後に、Google Classroomを通して教師がフィードバックを寄せた場合、学習者から高く評価される傾向がある（河内ほか, 2021）。

3-4 オンデマンド型授業

オンデマンド型授業については、本稿で検討した先行研究（石崎, 2021; 岩本・上原, 2021; 河内ほか, 2021; パリハワダナほか, 2021）を見る限り、否定的に捉える声が少なくなかった。オンデマンド型授業を好まない学習者は、対面授業・同時双方向型授業を問わず、教師・学習者間および学習者同士のインタラクションに重きを置いていた。一方、オンデマンド型授業を肯定的に捉えた学生は、自宅で学べること、時間が自由に使えること、通学時間が節約できることを利点として挙げた。

3-5 学習環境

学習環境については、ネット接続の不具合や、地域によってはGoogle Classroomが使用できない点などがデメリットとして挙げられた（石崎, 2021; 河内ほか, 2021）。Derakhshan et al. (2020) は、インタラクションを増やすことが大切とことわりつつ、ネット接続の環境を改善するだけで学習者の退屈さが解消するとも述べており、学習環境への配慮は不可欠である。

4 調査の方法

本節では、2021年度前期（4月～7月）に15週間（オンデマンド型授業1週分を含む）にわたり実施された日本語授業の受講者を対象に行った本調査の方法を概観する。

4-1 調査協力者

毎学期日本語プログラムの受講者に対し実施している授業評価アンケートにおいて本調査への協力への可否を尋ね、可と回答した47名のうち29名から協力を得た。29名の出身・性別・千葉大学での身分・受講した日本語のレベル・受講した地域の内訳は、表2の通りである。

全体の86%（25名）がアジア出身であること、大学院生とJ-PAC生⁵⁾の占める割合が高いこと、受講レベルは多少のばらつきがあるものの初級から上級まで網羅していること、受講した場所は日本45%（13名）と中国大陸・台湾48%（14名）が大半を占め、日本との時差の大きい地域（ドイツ）からは7%（2名）に止まっていることがわかる。

調査協力者が受講していた科目数はのべ82に上る。割合は図1の通りである。総合科目の受講者はのべ19名（23%）、以下、口頭表現科目16名（19%）、文法14名（17%）、文章表現12名（15%）、読解、漢字および統合型がそれぞれ7名（各9%）となっている。調

表2 調査協力者29名の属性等（単位：人）

| | |
|-------|---|
| 出身 | 中国大陸15、台湾4、韓国1、タイ1、ベトナム1、インドネシア1、バングラデシュ2、ドイツ2、ブラジル2 |
| 性別 | 女性17、男性12 |
| 身分 | 学部生1、大学院生13、J-PAC生10、特別聴講学生2、研究生3 |
| 受講レベル | 100番台：4、200番台：6、300番台：3、400番台：6、500番台：1、600番台：3、700番台：6、800番台：0 |
| 受講地域 | 日本13、中国大陸10、台湾4、ドイツ2 |

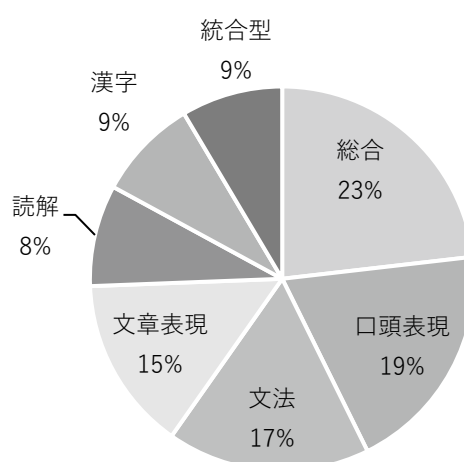


図1 受講科目の割合

査協力者は、週1コマから最大9コマまで、平均すると週に3.9コマの日本語授業を受講していた。

4-2 インタビューの実施方法・内容

ビデオ会議システムZoomを用いて、2021年8月19日から9月7日の間に40分間～1時間31分間の半構造化インタビューを実施した⁶⁾。インタビューの映像・音声は協力者の許可を得たうえで録画・録音した。インタビューに用いる言語は、日本語・中国語・英語の中から調査協力者が選択した結果、日本語8名・中国語12名・英語9名となった⁷⁾。また、より率直な回答を得るため、インタビューは授業担当教師ではなく、日本語・中国語・英語を母語・準母語レベルで使用できる人文公共学府に所属する大学院生7名が行った⁸⁾。

インタビューにおける質問は、本稿の共著者全員でブレインストーミングをした上で、以下の項目を中心に行うこととした。

- ① ライフ・ストーリー：生い立ち、家族や友人、受けてきた教育、転居の経験、コロナ禍の影響、これまでの言語学習

- ②オンラインでの日本語学習経験：先生やクラスメイト、学習モード、時間の使い方、受講中のネット環境、授業内活動、授業外課題、試験、フィードバック、周囲からのサポート、授業の難易度、意欲や気持ち、達成感、うまく勉強するコツ
- ③将来のビジョンや夢：日本語学習の目標、コロナ後に望む授業形式、授業に対する心残りや心配な点、カリキュラムに望む改善点

本調査での重点となるのは②の千葉大学でのオンライン日本語学習だが、調査協力者をよりよく理解し、インタビューを円滑に行うべく、これまでの人生経験や今後の見通し(①と③に該当)についても質問項目を設けた。複数の科目を受講した協力者には、特に印象に残っている科目を1つか2つ選んで話してもらったこととした。

4-3 分析方法

データの分析の手法は、Braun & Clarke (2006) の「テーマ分析」(thematic analysis)を採用し、「データに接近する」・「初期コードを付ける」・「テーマを探す」・「テーマを見直す」・「テーマを定義・命名する」・「報告を執筆する」の6段階で分析した。

まず、第一著者(野村)が音声データを適宜参照しながら、インタビューを行った大学院生の作成した調査協力者ごとのメモを全員分読み、データとの距離を縮めた。各調査協力者を比較しながら、初期コードを付けたところ、「インタラクションの不足」と「学習環境のばらつき」が初期コードとして浮上した。その後、全共著者が、コーディネーターを務めるコースに在籍した調査協力者について、初期コードの付いたメモを見直したり、音声データを再度確認したりするなどして、分析を補強するコメントをメモに加筆した。各人が分析メモを相互に参照しながらテーマを練り込んだ後、各人のコメントを踏まえてデータを整理した。テーマは最終的に先行研究と同様、「インタラクション」・「アウトプット」・「フィードバック」・「オンデマンド型授業」・「学習環境」の5つにまとまった。この5つのテーマに沿って次節の結果と考察を構成した。執筆にあたっては、引用データに個人を特定する情報が含まれないよう配慮した。

5 結果と考察

5-1 インタラクション

授業形態に関しては、「(オンラインでも対面でも)どちらでもよい」(J12)、「千葉大学の(対面)授業を受けたことがないからわからない」(J8)と述べた2名を除き、本調査に参加したほぼすべての学習者がオンラインよりも対面授業を好むと回答した。これは、今回調査の対象となったオンライン授業が、コロナ禍における日本留学の代替措置であることと関係している。「友達ができなかったのは悲しい」(E1)、「留学生にとっては、留学先の国へ行きたい。みんなに生で会いたい」(J4)、「せっかくの留学なのだから、やっぱり交流がしたい」(C4)という声には、日本への渡航が叶わなかった無念さがにじむ。

とりわけ、教師・学習者間はもとより、「練習時間や他の学生との交流がしやすい対面授業がいい」(E15)、「もっとクラスメイトと交流ができればよかった」(E8)、「(オンラインでは)場が冷めてしまいがち」(E2)など、学習者間のインタラクションを望む声が多く聞かれた。ただし、教師・学習者間のインタラクションに関しては「対面よりオンラインのほうが質問しやすい」(J8)など、オンライン授業に利があるとする声もある。一方で、「(同時双方向型の)クラスで友達ができた」(C9)、「日本人の学生と交流している」(C13)、「イングリッシュ・ハウス⁹⁾での日本人学生との交流が役立った」(E10)など、授業外で日本語を使用したインタラクションを積極的に増やした学習者もいた。「休み時間が10分しかないので先生と十分に話せない。…(母国の)大学は30分ある」(E10)と、カリキュラム編成の違いもインタラクションに影響を及ぼすことがわかった。

日本語授業は留学生のネットワーク作りの機能を担う。とりわけZoomによる授業では、先述のとおり学生同士のヴァーチャルなコミュニティーをいかに作れるかが学習を成功させる鍵となる(Lomicka, 2021)。留学の代替としてオンライン日本語授業を提供する際は、Chiu (2021)が提案するような、学習者が教師・他の学習者と交流できる場を作り一体感を醸成する、日々の生活についての気持ちを語り合う場を設ける、ピアサポート・グループを作るなどの対策を、可能なものから試すことも検討できよう。授業前後にZoomセッションを設けるか、授業外での交流の場を提供するなどして、インタラクションを増やす工夫を試みてもよいかもしれない。また、Zoom以外にWhatsAppなどのチャットアプリの併用がヴァーチャルな一体感(Guillén et al., 2020)や楽しさ(Zhang et al., 2021)を引き出せるという研究結果も出ている。ただし、中国大陸では使用できるチャットアプリには制限がある。本調査ではZoomなどのチャット機能の使用実態が十分に明らかにならなかったが、ZoomやLMSのチャット機能、あるいは中国大陸で使えるWeChatの利用などを授業に取り入れることが検討できよう。

5-2 アウトプット

オンライン授業でも、授業中のインタラクションが多くなるZoomを使用した同時双方向型授業については、「先生は間違いを直してくれるので学習の助けになった」(E2)、「日本人(の先生)と直接話せたクラスがよかった」(J11)など、肯定的な評価が散見された。また、同時双方向型でもアウトプットが十分でないと感じた学習者が、「話す機会が少ない」(E12)、「学生にもっと話をさせるべき」(E13)などと、不満をぶつける声もある一方で、オンライン授業に否定的な学生も、アウトプット量が多いと感じれば、「口頭表現の授業はクラスに3人しかいなかったため、話す機会が十分に持てた」(E2)と答えている。また、「口語表現が伸びた感じがする」(C8)、「千葉大学の授業はアウトプットが多い」(E7)、「先生が頑張ってくれた」(E12)など、教師の努力を労う声が聞かれた。インプットも「たくさん聞いたから(聞くのは)難しくない」(C1)と、アウトプットの高まりとの相乗効果が見られた。

コロナ禍で急遽始まったオンライン授業では、学習者の情意面でのケアについて十分な対応がなななかった (Hader et al., 2021)。しかし、教師の取り組みが学習への「真剣さ」(engagement) の鍵となる以上 (Parsons et al., 2014)、授業技術と並び学生への情意面でのケアのスキルを高めていく必要がある (Back et al., 2021)。ただし、オンライン授業は対面授業に比べ対人関係を築きにくいいため、教師が意識して学生と情意面でのつながりを深める必要がある。Zoomを使用した同時双方向型授業では、些細な工夫で学習者の参加度を高めることができる。例えば、ブレイクアウトルームなどを利用し少人数で話し合う、教師が画面共有した資料を学習者がマークアップする、絵文字機能・アンケート機能・チャット機能を活用するなどが挙げられる (Cheung, 2021)。今後の活用を目指したい。

5-3 フィードバック

授業中のアウトプットと同様に、授業外の課題へのフィードバックも重要となる。教師が迅速かつ丁寧なフィードバックを行った授業では、「フィードバックに関してはオンラインの方がよい」(E4) と答える学習者もいる。一方で、フィードバックに関する案内が不十分だと感じた学習者からは、「訂正の仕方が不明なのでクラスメイトに聞く」(C7) というコメントも聞かれた。さらに、パソコンに向かう時間が増えるためか、「宿題が多すぎて圧倒される」(C8・E11) などの意見もあり、異なる授業の間で課題の量を調整するなど、事前のコーディネーションを行う工夫が必要になってくるかもしれない。一方で自律学習の構えができていない学習者からは、「予習をすればうまくいく」(C15) という声も聞かれる。

教師が学習者の意欲を削がない程度のポジティブなプレッシャーを与え、モニタリングを含めた調整を随時行うことは、達成感や学習効果を高める上で重要になる (Wong, 2020)。しかし、オンラインでは意欲低下のスパイラルが起りやすく (Ferrer et al., 2020)、課題がこなせずに脱落してしまう学習者が出やすいことを念頭に置く必要がある。実際、亥鼻キャンパスでは、予習を多く課す反転授業が提供されているが、膨大な知識のインプット処理に手慣れた医薬系が専門の学習者や、文字学習の負担が少ない漢字圏出身者以外は脱落が目立つ。しかし、オンラインでのフィードバックについては、ポジティブな評価が目立つことから、学習者への案内を十分明確化することを条件に、コロナ後もDixon et al. (2021) がその有効性を示す、対面授業に加えて課題提出やフィードバックなどにLMSを併用したハイブリッド型授業へ転換していくことが選択肢となろう。

5-4 オンデマンド型授業

オンデマンド型授業については、「やめてほしい」(C8・E7)、「留学はおろか授業を受けている感じさななかった」(C4) など、石崎 (2021) を始めとする国内の日本語教育に関する先行研究と同様に、否定的な意見が目立った。同時に、「時間的に自由でいい」(C3)、「後で勉強しても大丈夫というメリットがある」(J6)、「文法の授業で先生の例文が面白かつ

た。…オンデマンドでいいと思った」(J8) など、オンデマンド型授業のメリットを感じる学習者がいることも明らかになった。

オンデマンド型授業では、時間・場所を自分でコントロールしやすくなるという意味での自律的学習が生じる余地が広がる。ただし、オンライン授業では学習意欲が低い学習者がさらに意欲を喪失しがちなため (Ferrer et al., 2020)、自律的学習を可能にするためには、教師からの明示的なサポートが求められる (Ruiz-Alonso-Bartol et al., 2021)。また、授業のジャンルも鍵となる。文字学習 (漢字授業) はオンデマンド型授業と比較的相性がよいとの報告 (Xu et al., 2021) があるが、文章表現に焦点を当てた授業全般とも相性のよい可能性がある。

5-5 学習環境

学習者のネット接続を中心とした学習環境にも十分に注意を払う必要がある。「ネット環境は問題ない」(C9・C13ほか) と回答した学習者が多かったものの、「マイクの調節が難しい。…他の人の声が聞こえなかったり、爆音だったり」(C4)、「(他のクラスメイトの)生活音が聞こえるのが気になってしまう」(E10) など、ある学習者の学習環境が他の学習者にも影響を与えてしまうことがわかった。とりわけ音声面での不満を漏らす学習者が目立った。Zoomでは技術的制約から声の波長が圧縮される事情もあり、「誰が答えたのかわからず混乱する」(C7) という声も聞かれた。「画面を見つめたくないから、宿題はさっさと済ませたい」(J4) と、パソコンの画面を長時間見つめたくない学習者もいる。「先生のネット環境が整備されているとよい」(E13)、「先生のネットが落ちた」(E8) など、教師側の接続環境にも意見が寄せられた。「学習がパソコンによって形作られる」(J6) と、IT技術への過剰な依存を指摘する声も聞かれた。

学習環境が多様なオンライン授業では、技術が使いこなせるかが否応なく鍵となる (Huang et al., 2021)。さらに、接続環境の改善は、退屈さの改善につながるなど、意欲面・情意面でも重要となる (Derakhshan et al., 2021)。少なくとも、静謐な環境と安定したネット接続を保障する措置を検討することが求められよう。また、教師の顔が大きすぎると授業の学習効果が下がるとの先行研究もあり (Pi et al., 2017)、Zoom等の画面表示では集中力を削がない配慮が求められる。さらにオンライン授業の質的向上のために、研修や授業見学などを通して教師が学習者としてオンライン授業を体感する、丁寧に学習者のニーズを分析する、技術的支援や研修を提供するなどの各種のコーディネーションも検討すべきである (Gacs et al., 2020)。

6 まとめ—コロナ後の日本語教育のありかたとは—

本稿では、千葉大学国際教育センターが2021年度前期に日本語授業を受講した学習者29名に実施した質的インタビュー調査の結果を報告した。学習者の多くが、オンライン授業

内での学習者間のインタラクションに困難を感じている。ただし、オンライン授業に不満に抱きながらも、アウトプット量が多い授業では、Zoomによる同時双方向型オンライン授業を肯定的に評価する学習者もいた。フィードバックについても、LMSを利用したフィードバックを高く評価する学習者がいる反面、課題の量に圧倒されたり、訂正の方法が伝わっておらず混乱したりした例も散見された。オンデマンド型授業に関する評価は概ね手厳しかったが、授業のジャンルや個人の適性にも影響される。学習環境については、他のクラスメイトのマイク音声について不満を漏らす学習者もいるなど、学習者個人よりクラス全体を視野に入れて整備すべき点が明らかになった。

今回の調査結果を踏まえ、千葉大学日本語プログラムはコロナ後にどのようなカリキュラムを提供すべきだろうか。一つに、LMSの使用を継続し、対面授業を再開後も課題や試験についてはLMSを使用するハイブリッド型授業（反転授業を含む）を実施することが選択肢に上がる。しかし、課題に関する指示は学生が混乱しないように明確にし、学習者の実態に応じ課題の分量を細やかに調節するなどの工夫が望まれる。対面授業とオンライン授業を融合したハイブリッド型授業は、対面授業と同程度の学習効果があり、特にLMSを使用することで「言葉の伸び」(language gain)が広がるとの先行研究がある(Dixon et al., 2021)。また、どのようなジャンルの授業がオンライン授業に向いているかも考察が待たれる。ライティング（文章表現）授業はハイブリッド授業と相性がよい可能性が高く（Dixon et al., 2021）、コロナ後もオンデマンド型授業を継続することを検討してもよいかもしれない。また、Zoomのチャット機能などを活用して授業内でヴァーチャルな一体感を築けるように支援を行うことも重要だが、ネットいじめの危険性なども皆無ではない。一体感から排除されてしまう学習者が出ないように配慮が求められる。

今後の研究としては、本稿で明らかになったオンライン日本語授業に対する学習者の意識を、教師による授業の自己評価・振り返りと織り合わせて検討し、教育の全体像をより丹念に把握していくことが必要となろう。本稿では詳しく論じることができなかったが、ライフ・ストーリーなどのデータを詳細に分析することで、生き立ちや言語・文化的背景が、学習者の意識にどのような影響を与えるのかも検討する価値がある。Zoomのチャット機能などを通じて、教師の目が届かないところで学習者同士がどのようなインタラクションをしているかも重要な研究テーマとなる。さらに、オンライン日本語授業がどの程度の言葉の伸びをもたらすのかに関しても、実証的な論考が待たれる。本稿がコロナ後の教育実践の質的向上と研究の進展に資すれば幸いである。

謝辞

本調査にご協力いただいた学習者のみなさま、研究補助者としてインタビューを担当した大学院生の方々、そしてオンライン日本語授業の実施にあたり日々ご尽力いただいている非常勤講師の先生方に記して感謝を申し上げます。

注

- 1) 日本語科目においては、千葉大学の非協定大学に在籍する国費の「日本語・日本文化研修留学生」。
- 2) 半年間の日本語集中教育を必要とする国費（大使館推薦）の「研究留学生」および「教員研修生」。
- 3) 「聞く・読む・話す・書く」の4技能をバランスよく育成するための週2～3回の授業。
- 4) 14名のうち9名は西千葉・松戸キャンパスに所属する学生。日本語科目は、学習者が所属するキャンパスで単一のレベルの授業を履修することを前提にカリキュラムが組まれている。しかし、2021年後期は全授業がオンライン実施となったため、希望科目が受講できなかった他キャンパスの学生に亥鼻キャンパスの授業を開放した。
- 5) J-PAC（千葉大学短期交換留学プログラム）は、千葉大学と大学間交流協定を締結している大学の学部生のうち、日本文化・日本社会に関心を持つ学生を対象に行われるプログラム。
- 6) 録音・録画の許可に加え、調査への参加が任意なこと・調査遂行者が守秘義務を遵守すること・調査参加者に情報を開示することなどについて説明を行い、全員から書面で同意を得た。
- 7) J・C・Eの頭文字は、それぞれインタビューで用いた日本語・中国語・英語を示す。ただし、E7は英語の使用を当初は希望していたが、実際には母語である中国語を用いた。データ数が少ないことから使用言語別の分析は行っていない。
- 8) 事前に約1時間のトレーニングを行い、インタビューの質と信頼性の確保に努めた。
- 9) イングリッシュ・ハウスは千葉大学の学生・教職員に対し実践的な英語教育や英語でのコミュニケーションを取る場を提供する施設。日本語学習者が日本語を使って日本の学生と交流する機会も設けられている。

参考文献

- 石崎俊子 (2021) 「日本語オンライン授業の実践と授業評価アンケートによる分析—名古屋大学国際言語センターにおける取り組み—」『名古屋大学人文学研究論集』4, 245-261.
- 岩本遠億・上原由美子 (2021) 『オンラインによるインターアクション：日本語教育の可能性—2020年度春学期オンライン授業・活動報告書—』神田外国語大学留学生別科
- 河内彩香・村田晶子・長谷川由香・竹山直子・池田幸弘 (2021) 「教員と学習者はオンライン授業をどうとらえたか—ZoomとGoogle Classroomを併用した日本語教育—」『多文化社会と言語教育』1, 30-45.
- バリハワダナルチラ・河合淳子・阿久澤弘陽 (2021) 「実践報告 オンライン授業での日本語能力上達を左右する要因—2020年度前期の京都大学日本語科目履修者及び担当教員に対するアンケート調査を基に—」『京都大学国際高等教育院紀要』4, 19-39.
- Back, M., Golembeski, K., Gutiérrez, A., Macko, T., Miller, S., & Pelletier, D. L. (2021). "We were told that the content we delivered was not as important:" disconnect and disparities in world language student teaching during COVID-19. *System*, 103, 102679.
- Braun, V., & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. *Qualitative Research in Psychology*, 3(2), 77-101.
- Cheung, A. (2021). Synchronous online teaching, a blessing or a curse? Insights from EFL primary students' interaction during online English lessons. *System*, 100, 102566.
- Chiu, T. K. (2021). Applying the self-determination theory (SDT) to explain student engagement in online learning during the COVID-19 pandemic. *Journal of Research on Technology in Education*. Advanced online publication.

- Derakhshan, A., Kruk, M., Mehdizadeh, M., & Pawlak, M. (2021). Boredom in online classes in the Iranian EFL context: Sources and solutions. *System, 101*, 102556.
- Dixon, T., Christison, M., Dixon, D. H., & Palmer, A. S. (2021). A meta - analysis of hybrid language instruction and call for future research. *The Modern Language Journal*. Advanced online publication.
- Ferrer, J., Ringer, A., Saville, K., Parris, M. A., & Kashi, K. (2020). Students' motivation and engagement in higher education: The importance of attitude to online learning. *Higher Education*. Advanced online publication.
- Gacs, A., Goertler, S., & Spasova, S. (2020). Planned online language education versus crisis - prompted online language teaching: Lessons for the future. *Foreign Language Annals, 53*(2), 380-392.
- Guillén, G., Sawin, T., & Avineri, N. (2020). Zooming out of the crisis: Language and human collaboration. *Foreign Language Annals, 53*(2), 320-328.
- Hadar, L. L., Ergas, O., Alpert, B., & Ariav, T. (2020). Rethinking teacher education in a VUCA world: student teachers' social-emotional competencies during the Covid-19 crisis. *European Journal of Teacher Education, 43*(4), 573-586.
- Huang, F., Teo, T., & Guo, J. (2021). Understanding English teachers' non-volitional use of online teaching: A Chinese study. *System, 101*, 102574.
- Lomicka, L. (2020). Creating and sustaining virtual language communities. *Foreign Language Annals, 53*(2), 306-313.
- Moser, K. M., Wei, T., & Brenner, D. (2021). Remote teaching during COVID-19: Implications from a national survey of language educators. *System, 97*, 102431.
- Parsons, S. A., Nuland, L. R., & Parsons, A. W. (2014). The ABCs of student engagement. *Phi Delta Kappan, 95*(8), 23-27.
- Pi, Z., Hong, J., & Yang, J. (2017). Does instructor's image size in video lectures affect learning outcomes? *Journal of Computer Assisted Learning, 33*(4), 347-354.
- Ruiz-Alonso-Bartol, A., Querrien, D., Dykstra, S., Fernández-Mira, P., & Sánchez-Gutiérrez, C. (2021). Transitioning to emergency online teaching: The experience of Spanish language learners in a US university. *System*. Advanced online publication.
- Wong, R. (2020). When no one can go to school: does online learning meet students' basic learning needs? *Interactive Learning Environments*. Advanced online publication.
- Xu, Y., Jin, L., Deifell, E., & Angus, K. (2021). Chinese character instruction online: A technology acceptance perspective in emergency remote teaching. *System, 98*, 102542.
- Zhang, Z., Liu, T., & Lee, C. B. (2021). Language learners' enjoyment and emotion regulation in online collaborative learning. *System, 98*, 102478.